

【インタビュー】アーティストたちのコロナ禍

「Assemble – 集積する技法と身体 –」展(会期：2020年7月18日～8月10日)では、本展とあわせて、コロナ禍におけるアーティストたちの様子もご紹介しました。



1月に中国武漢から感染が拡大した新型コロナウイルス感染症は、瞬間に世界を激変させました。伊丹市立工芸センターでも3月9日から5月31日まで約3か月もの間、休館を余儀なくされ、様々な事業が中止や延期となり、職員は皆やるせない思いを経験しました。

これまで当たり前であった日常は大きく様変わりし、これから先の世界を想像して心弱くなってしまう人も多いことでしょう。しかし、このような状況下においてもアーティストたちは強くしなやかに、それぞれの制作を続けています。困難な時代にあっても、希望を見出そうとするアーティストたちは現在どのように過ごしているのでしょうか。本展出品作家5名に伺ってみました。

“ アーティストの皆さんはこの状況下、どのように過ごしていますか？ ”

コロナ禍の中で感じたこと

青木千絵

コロナウイルスの脅威によって、これまで想像もしていなかった世界が現実になりました。身近に迫ってきた感染拡大は、死と隣り合わせに生きていることを強く認識させ、感じたことのない恐怖を覚えました。

勤務する大学では、全てがリモート授業になり、これまで当たり前だったコミュニケーションの方法も大きく変化しました。ほぼ毎日、パソコンのディスプレイの中にいる相手に話しかける日々が続きました。自分の声を聞いているはずの相手の反応が、直に感じ取れないもどかしさや、どこか実態がないような物足りない感覚を感じていました。

そんな生活の中で、制作はこれまでと変わらず続けていました。1.5cm 程の炭を指で持って、塗り面をひたすら時間をかけて研ぐ作業（炭研ぎ）です。

炭の匂いや研ぐ時のサーサーという音、指先に微かな振動で伝わる研いでいる感覚…この五感で感じる作業は、私の心を落ち着かせ深く満たしてくれました。



パソコンのディスプレイの中では、極めて感じ取りにくいのがディテールや質感だと思います。我々の本能には、このディテールや質感を目や手や鼻や耳、肌で感じ取ることで満たされるものがあるように思います。

工芸という仕事は、その人間の根源にある欲求を満たしてくれる気がしています。



青木千絵 | AOKI Chie 1981年岐阜県生まれ。2010年金沢美術工芸大学大学院 博士後期課程 美術工芸研究科 工芸研究領域 漆・木工コース修了。大学時代より、一貫して漆で人体を制作する。2014年「ヒトのカたち、彫刻 津田亜紀子 / 藤原彩人 / 青木千絵」(静岡市美術館)、2017年「美術の中のかたち—手で見る造形 青木千絵展 漆黒の身体」(兵庫県立美術館)、2018年「孤独の身体」(現代美術艸居 / 京都)

“アーティストの皆さんはこの状況下、どのように過ごしていますか？”

田中雅文

2020年1月、新型コロナウイルスが発見されて以降、その被害は瞬間に全世界へと広がりました。日本でも多くの被害をもたらしたこの感染症により、身の回りの環境は大きく変化していきました。

普段から、作品の制作は工房内で進めているため、外出の制限ではあまり影響を受けませんでした。作品を発表する場所、そして展示場へご来場いただくことが難しくなり、作家としての活動が制限されることになりました。

また私自身、大阪芸術大学の陶芸コースの非常勤講師をしておりますが、4月以降の授業体制が大きく変わり、インターネットを通しての遠隔授業となりました。

これまでのカリキュラムや授業の形態をはじめから見直し、全く新しいシステムでの授業に現場は多忙を極め、素材や環境に触れ制作することで学びを深める芸術大学という場において、どのようにして実習を進めていくのか？試行錯誤の日々が続きました。

最終的に、私が担当しております基礎実習は素材を学生の自宅や下宿先に送付し、大学から双方向型対話ツールを使って課題の説明やデモンストレーションを行いました。準備段階では、どうなることか…と思いましたが、結果的には課題が基礎的なものだったこともあり、無事に実習授業を進めていくことができました。

そして何より学生の皆さんそれぞれが、様々な工夫をしながら受講していただいたことが、大きな力になりました。

新型コロナウイルスの世界的猛威の中、たくさんの方が失われてしまいました。しかし、その一方で不可抗力的に生まれたルールや仕事への取り組み方、生活様式は、今まで慌ただしく過ぎていばかりの時間にストップをかけ、新たな価値観を生み出すきっかけとなったのではないかと思います。

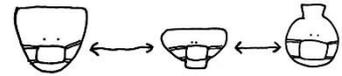
これから先、様々な考え方が変化し、常識とされていたことが書き換えられていく未来に期待と不安を抱きつつ、一日も早くこの未曾有の事態が収束することを心より願っています。



田中雅文 | TANAKA Masafumi 1982年大阪府生まれ。2005年大阪芸術大学 工芸学科陶芸コース卒業。「集まり」をテーマに小さなピースを積み重ねた作品を制作する。2014年「アジア現代陶芸展 2014」(金海クレイアーク美術館 / 韓国)、2016年「以美為用展 ~掌中ノ珠~」(高島屋京都店美術画廊 / 京都)、2020年「現代茶ノ湯スタイル展 縁 2020」(西武渋谷店美術画廊 / 東京)

“アーティストの皆さんはこの状況下、どのように過ごしていますか？”

釣光穂



自粛期間日記

二〇二〇年三月
絵と文・釣光穂



釣光穂 | TSURI Mitsuho 1991年兵庫県生まれ。2016年京都市立芸術大学大学院 美術研究科 修士課程工芸専攻陶磁器修了。古くからある紐づくりの技法をもとに、編みものように陶芸を行う。2017年「第7回菊池ビエンナーレ」(菊池寛実記念智美術館/東京) 奨励賞、2019年「金沢市工芸展」NHK金沢放送局長賞、2020年個展「ぶれいるーむ」(KUNST ARZT/京都)、2020年金沢卯辰山工芸工房修了。

コロナ禍の近況

中村弘峰

新型コロナウイルスの影響により、軒並み国内の夏祭り等も中止となる中、私が毎年携わっている博多祇園山笠も中止となりました。

しかし、博多総鎮守櫛田神社がこの状況において、そもそも約780年前に疫病退散を起源として始まった博多祇園山笠を是が非でも奉納したいと決意し、境内の飾り山笠1基のみ建設することとなりました。そういう経緯もあり山笠の表側を父の中村信喬が、見送り側を中村弘峰が制作させていただきました。

表の表題は「清正公虎退治誉（せいしょうこうとらたいじのほまれ）」。見送りは「桃太郎鬼退治誉（ももたろうおにたいじのほまれ）」です。



清正公虎退治誉



桃太郎鬼退治嘗

7月1日に公開となり、来年の6月まで飾られます。

山笠中止の上でそれでもこの飾り山を作るという決断をされた櫛田神社の思いを受け、精一杯制作にあたりました。

約八百年前、疫病退散の祈願に端を発する山笠本来の意味を噛み締めた日々でした。

一刻も早く皆が安心して生きられる日々が来ることを祈っています。



中村弘峰 | NAKAMURA Hiromine 1986年福岡県福岡市生まれ。2011年東京藝術大学大学院 美術研究科彫刻専攻修了。博多人形師の四代目として生まれ、伝統を今に受け継ぎながら現代のヒーロー像を形にしている。2016年第3回金沢・世界工芸トリエンナーレ コンペティション部門 優秀賞受賞、2019年「SUMMER SPIRITS」(POLA MUSEUM ANNEX / 東京)、2020年九州芸文館トリエンナーレ大賞受賞。

“アーティストの皆さんはこの状況下、どのように過ごしていますか？”

宮田彩加

私の作家活動において、まず初めにコロナの影響を受けたのは2月末のアートフェアが中止になったことでした。その後、他のアートフェアも延期になったり、展覧会は開催されてもオープニングイベントやトークイベントが中止になったりと続々と発表の機会が奪われました。3.11 東日本大震災の際も気持ちがどんよりしましたが、あの時は“復興あるのみ！！”と前向きな気持ちになるしかなく状況でした。今回は終わりが見えない恐怖であり、展覧会やアートフェアが開催されるようになって、この業界は不景気になれば作品が売れない、そんな漠然とした不安に襲われたこともありました。

とは言え、ここで冷静に考え直したのです。いやいや、自粛生活っていうけど、そもそもこれまでもアトリエに引きこもって制作してたやん？不景気が襲ってきたとしても、これまでも贅沢な生活なんてしてなかったやん？あれ・・・？結局、私自身の生活は然程変化がない？？？と。

こんな時こそ、作品を作り貯めよう。いつか発表の機会は訪れる。

私の大好きな先輩作家さんがこの時にとても素敵な言葉をくださいました。「作品は腐らない。」と。

その言葉を胸に今日もアトリエに引きこもり、作品制作に励んでいます。

STAY HOME 期間中、アマビエやマスクの作品などコロナ禍に生きた作家として制作に活かしていました。





宮田彩加 | MIYATA Sayaka 1985 年京都生まれ。
2012 年京都造形芸術大学大学院 芸術表現専攻 修士課程 染織領域修了。コンピューターマシンを使って、オリジナルのテクニックで刺繍作品を制作する。2017 年「交わるいと「あいだ」をひらく術として」（広島市現代美術館）、2019 年「第 22 回 岡本太郎現代芸術賞展」入選、2020 年 5 月「もようづくし」（和歌山県立近代美術館）。